

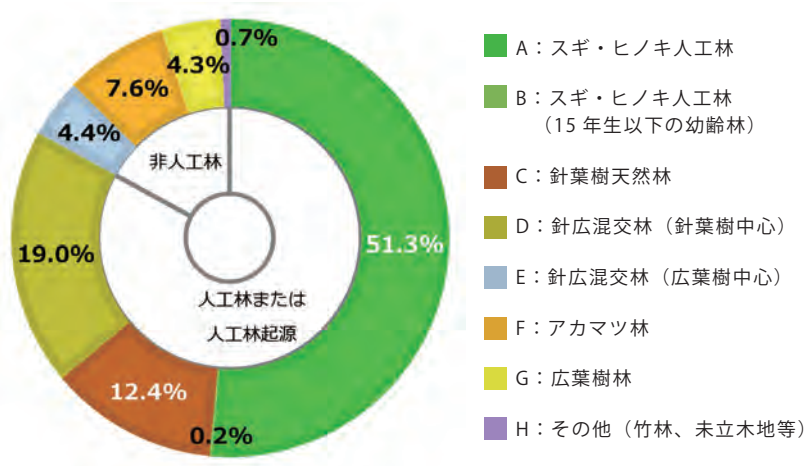
第3章 現在の森林の姿

(平成29年度～令和元年度現況把握調査結果より)

1. 現在の森林状況

本構想の検討に先立ち、実際の森林の状況把握を目的に、平成29年度(2017)から令和元年度(2019)の3ヵ年度にわたって村内全森林の現況把握調査を実施しました。現地調査では、村内の森林を踏査して森林のタイプ区分を行い、GIS(地理情報システム)によりデータ化しました。

本村の森林は、過去の徹底した植林により、伐期を迎えた10齡級程度の主にヒノキからなる人工林が多くを占めます。わずかに見られる広葉樹林は概ね二次林であり、アカマツやモミをはじめとする針葉樹と広葉樹が混生する針広混交林が比較的多く見られます。林齢100年を越える広葉樹を主とした針広混交林は存在しません。



現地調査の結果、以下に示す8つの森林区分が確認されました。森林区分は、ヒノキやスギなどの森林の上層を形成する優占種のほか、間伐や下刈り、枝打ちといった森林整備の実施状況を加味してさらに17の細区分に区分しました。

【現在の森林区分】

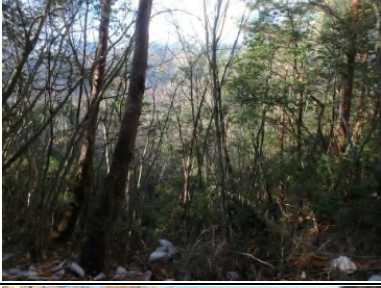
区分	現況の森林タイプ等	細区分	内容	面積 (ha)	割合 (%)
A	スギ・ヒノキ人工林	A1	林齢が整った一斉林。枝打ちや間伐等の施業が継続されている。林床には下草が生えている。	1,743	23.5%
		A2	林齢にばらつきがある。枝打ち、間伐はしてあるが、2回目以降の施業が遅れている。下草が少ない。	1,883	25.4%
		A3	植林して以降は何も施業されていない。アカマツ等が混生する林分が見られる。下草がほとんどない。	181	2.4%
B	スギ・ヒノキ人工林 (15年生以下の幼齢林)	B1	15年生以下の幼齢林。下刈り等、施業されている。	13	0.2%
		B2	15年生以下の幼齢林。下刈り等、施業されていない。	2	0.0%
C	針葉樹天然林	C	ヒノキのほか、自然発生したアカマツやモミが生育し、概ね天然林の様相を呈する。材として活用できる大径木が生育する。	921	12.4%
D	針広混交林 (針葉樹中心)	D1	ヒノキやスギにアカマツや広葉樹が混生する。除間伐等、施業されている。ヒノキの複層林を含む。	193	2.6%
		D2	ヒノキやスギにアカマツや広葉樹が混生する。材として活用できる大径木が生育する。植林して以降は何も施業されていない。	409	5.5%
		D3	ヒノキやスギにアカマツや広葉樹が混生する。下刈りと1回程度の間伐が行われているが、それ以降は何も施業されていない。	309	4.2%
		D4	ヒノキやスギにアカマツや広葉樹が混生する。林齢や林分にはばらつきがある。	499	6.7%
E	針広混交林 (広葉樹中心)	E1	広葉樹のほかアカマツ等が混生する。材として活用できる大径木が生育する。	77	1.0%
		E2	40年生以下の広葉樹のほかアカマツ等が混生する。	246	3.3%
F	アカマツ林	F1	主にアカマツが優占する。マツタケ林(二段林)として施業されている林分のほか、今後マツタケ林になると思われる森林を含む。	286	3.9%
		F2	アカマツが優占するが、広葉樹と混生する。低木類が多い。	280	3.8%
G	広葉樹林	G1	多数の樹種が混生する。材として活用できる大径木がある。	145	1.9%
		G2	多数の樹種が混生する。未口10cm以下の小径木が多く、ヤブ状の林分が見られる。	177	2.4%
H	その他	H	竹林、未立木地、崩壊地、伐採跡地等	53	0.7%
合計				7,416	100%

注) 区分及び面積は平成29年度(2017)～令和元年度(2019)にかけての3ヵ年度の現況把握調査結果による

【森林区分の概況（1）】

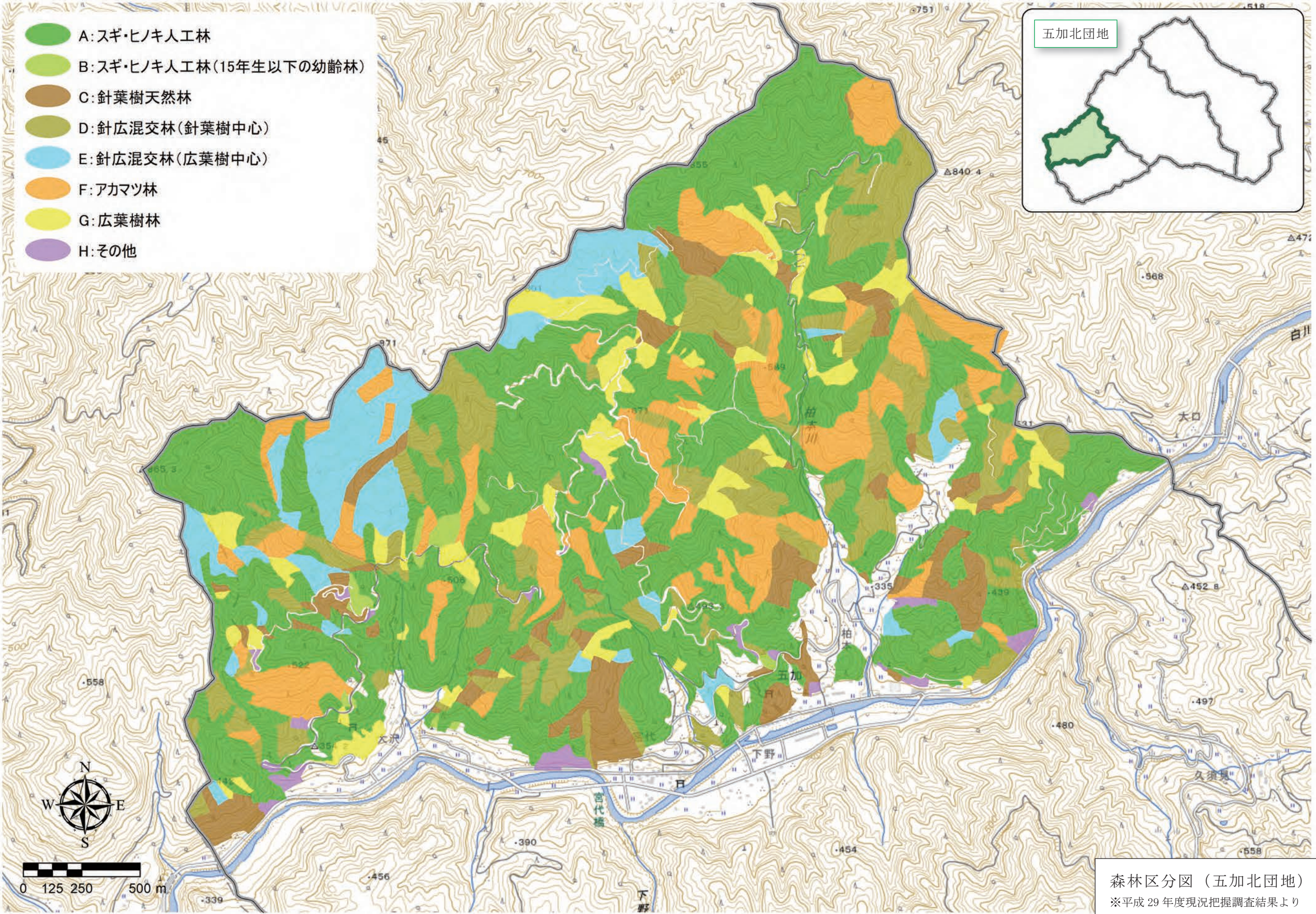
区分記号		区分概況		森林の状況
A スギ・ヒノキ人工林	A1			・林齢が整った一斉林 ・枝打ちや間伐等の施業が継続されている。 ・下草が生えている
	A2			・林齢にばらつきがある ・枝打ち、間伐はしてあるが、2回目以降の施業が遅れている ・下草が少ない
	A3			・植林して以降は何も施業されていない ・アカマツ等が混生する林分が見られる ・下草がほとんどない
B スギ・ヒノキ人工林（幼齢林）	B1			・15年生以下の幼齢林 ・下刈り等、施業されている
	B2			・15年生以下の幼齢林 ・下刈り等、施業されていない。
C 針葉樹天然林	—			・ヒノキのほか、自然発生したアカマツやモミが生育し、概ね天然林の様相を呈する ・材として活用できる大径木が生育する

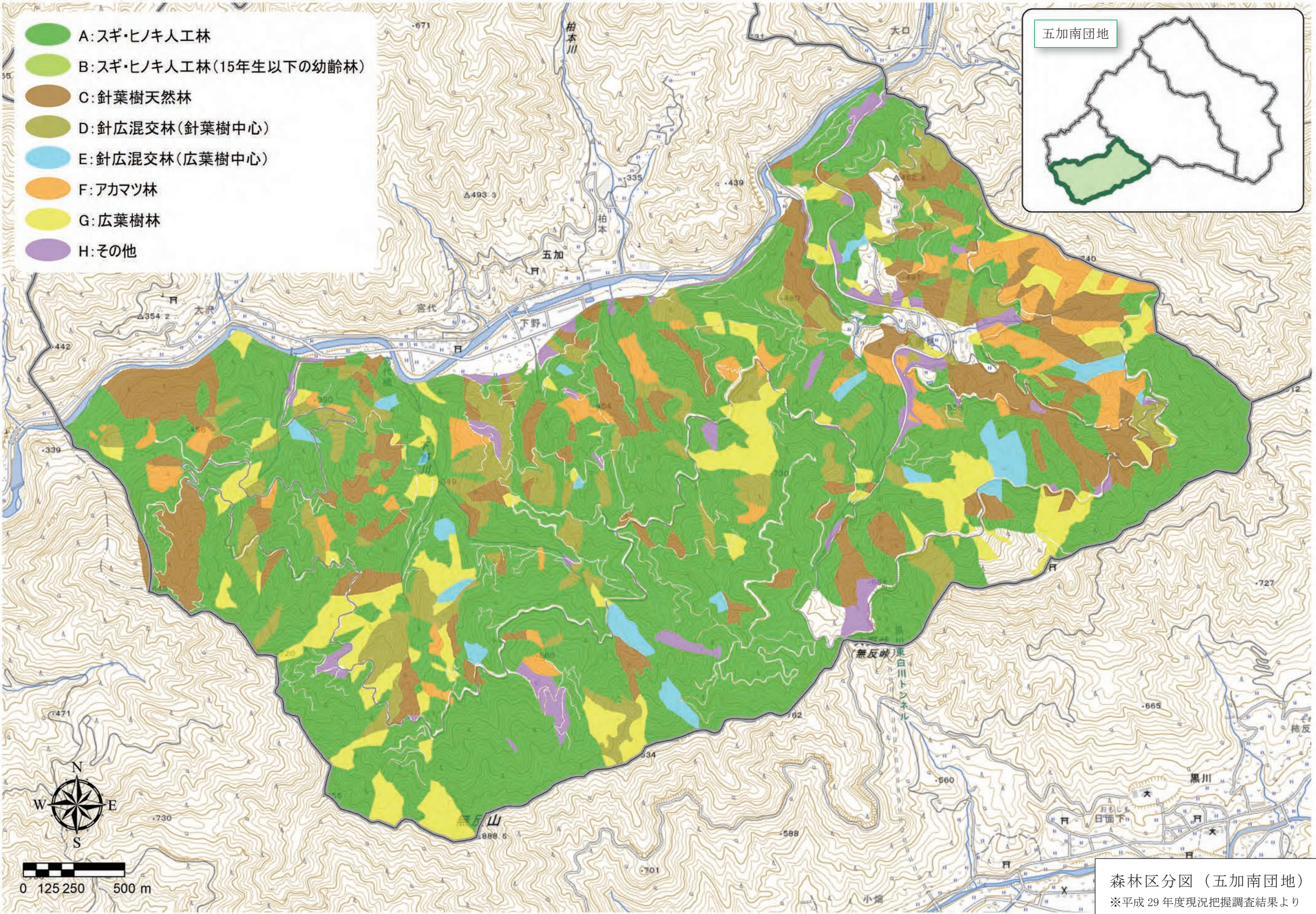
【森林区分の概況（２）】

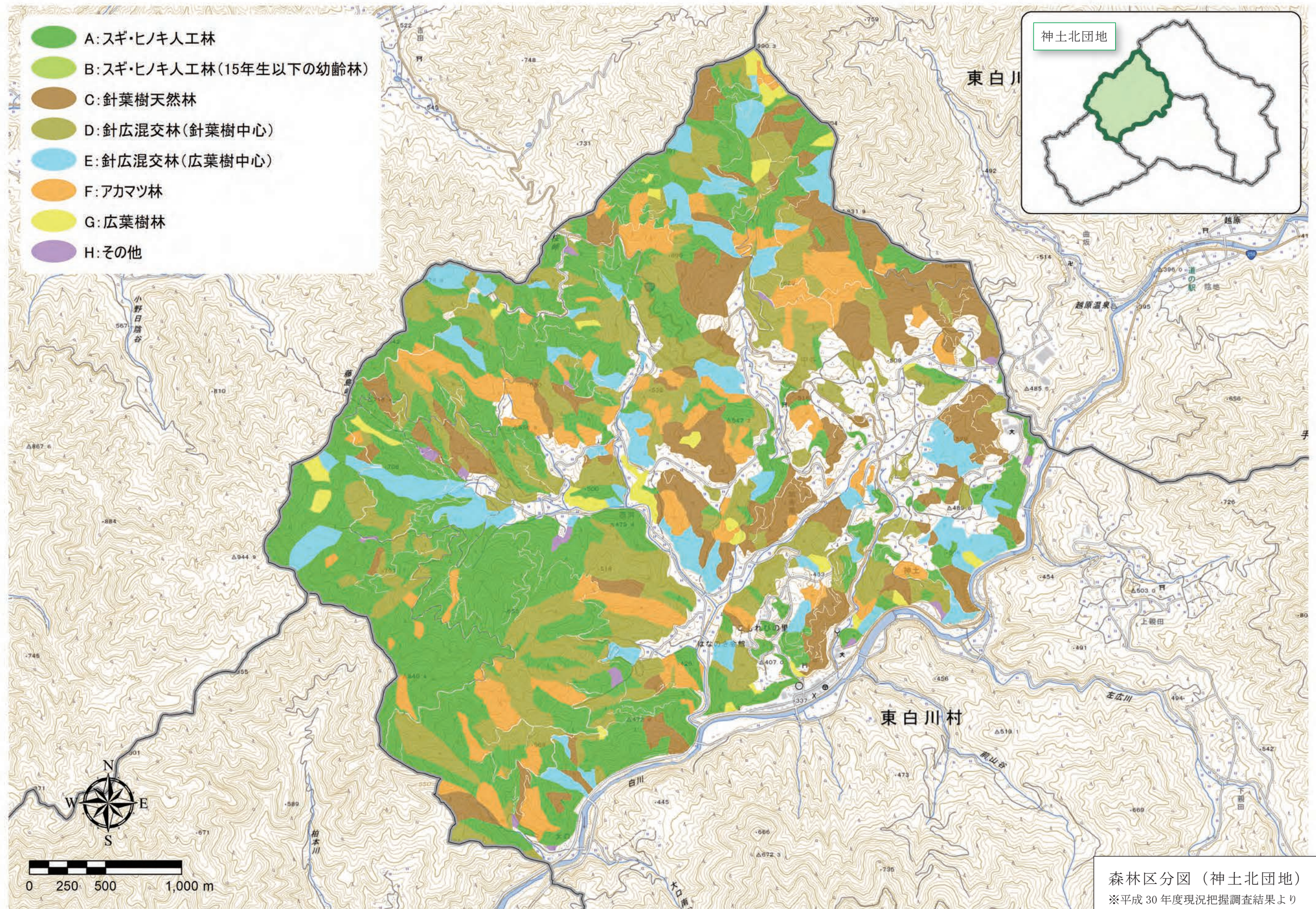
区分記号		区分概況		森林の状況
D 針広混交林 （針葉樹中心）	D1			・ヒノキやスギにアカマツや広葉樹が混生する ・除間伐等、施業されている ・ヒノキの複層林を含む
	D2			・ヒノキやスギにアカマツや広葉樹が混生する ・材として活用できる大径木が生育する ・植林して以降は何も施業されていない
	D3			・ヒノキやスギにアカマツや広葉樹が混生する ・下刈りと 1 回程度の間伐が行われているが、それ以降は何も施業されていない
	D4			・ヒノキやスギにアカマツや広葉樹が混生する ・林齢や林分によらつきがある。
E 針広混交林 （広葉樹中心）	E1			・広葉樹のほかアカマツ等が混生する ・材として活用できる大径木が生育する
	E2			・40 年生以下の広葉樹のほかアカマツ等が混生する

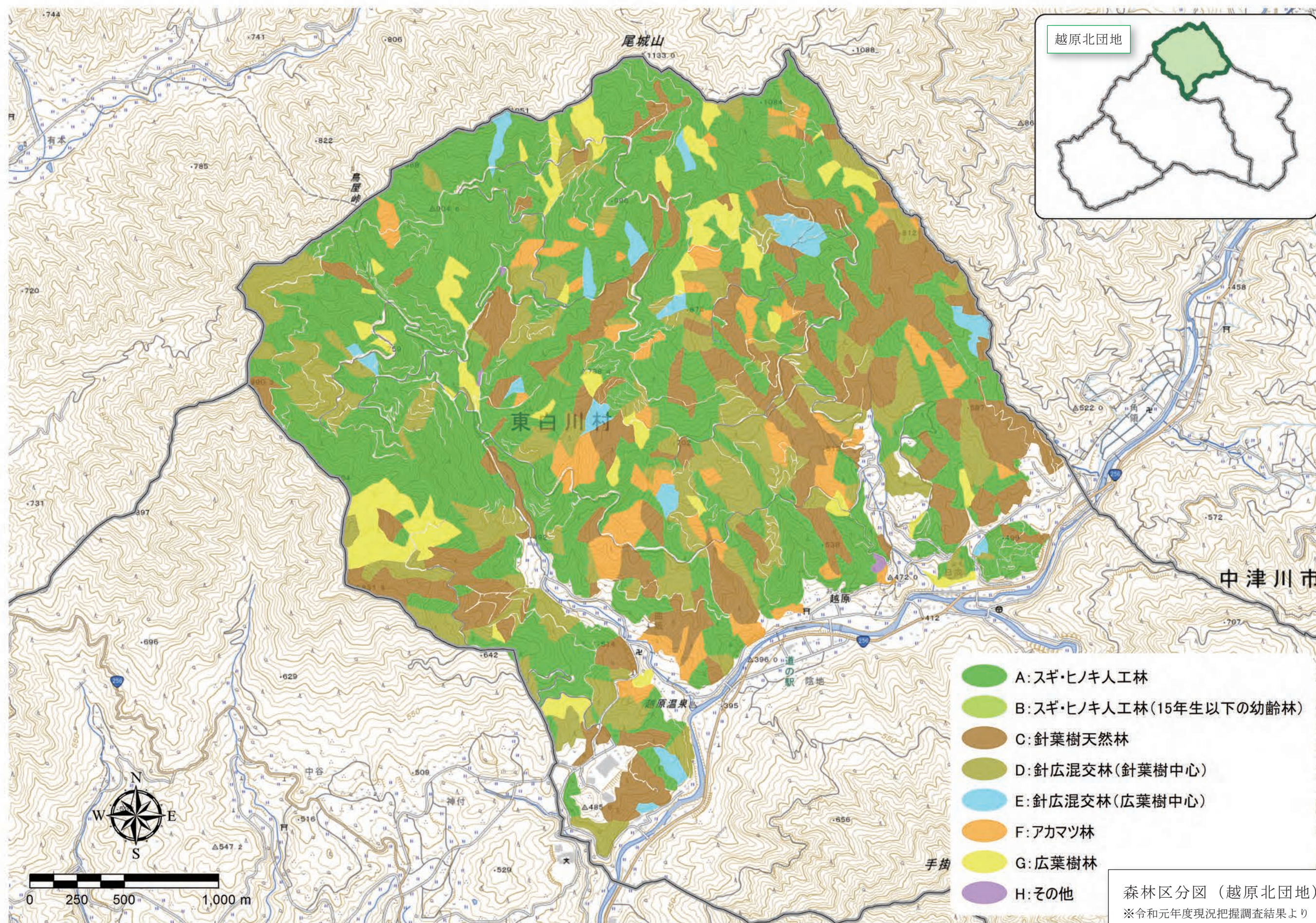
【森林区分の概況（3）】

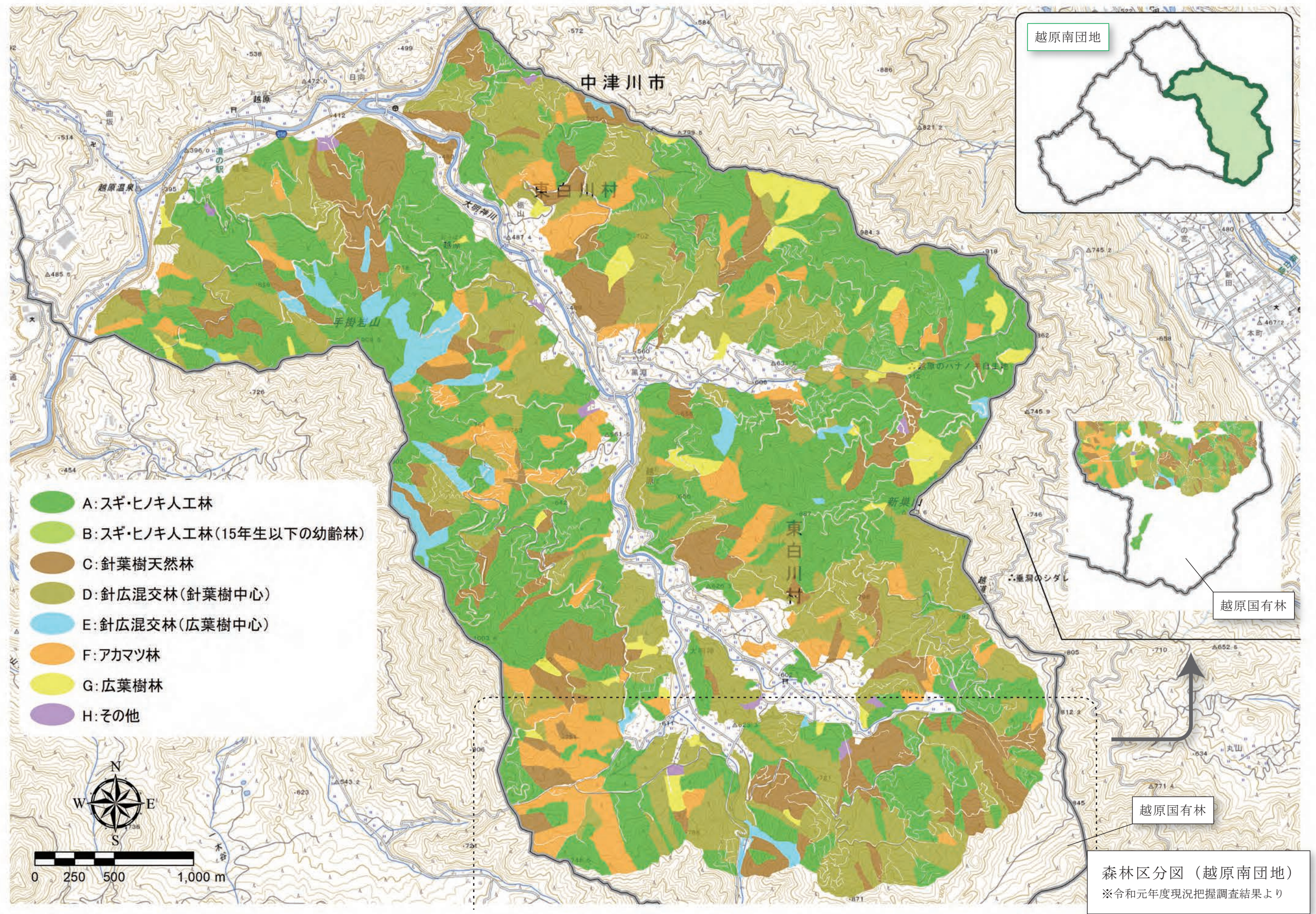
区分 記号		区分概況		森林の状況
F アカマツ林	F1			・主にアカマツが優占する ・マツタケ林（二段林）として施業されている林分のほか、今後マツタケ林になると思われる森林を含む
	F2			・アカマツが優占するが、広葉樹と混生する ・低木類が多い
G 広葉樹林	G1			・広葉樹林 ・多数の樹種が混生する ・材として活用できる大径木がある
	G2			・広葉樹林 ・多数の樹種が混生する ・末口 10cm 以下の小径木が多く、ヤブ状の林分が見られる
H その他	-			・竹林、未立木地、崩壊地、伐採跡地等











2. 森林の現状と課題

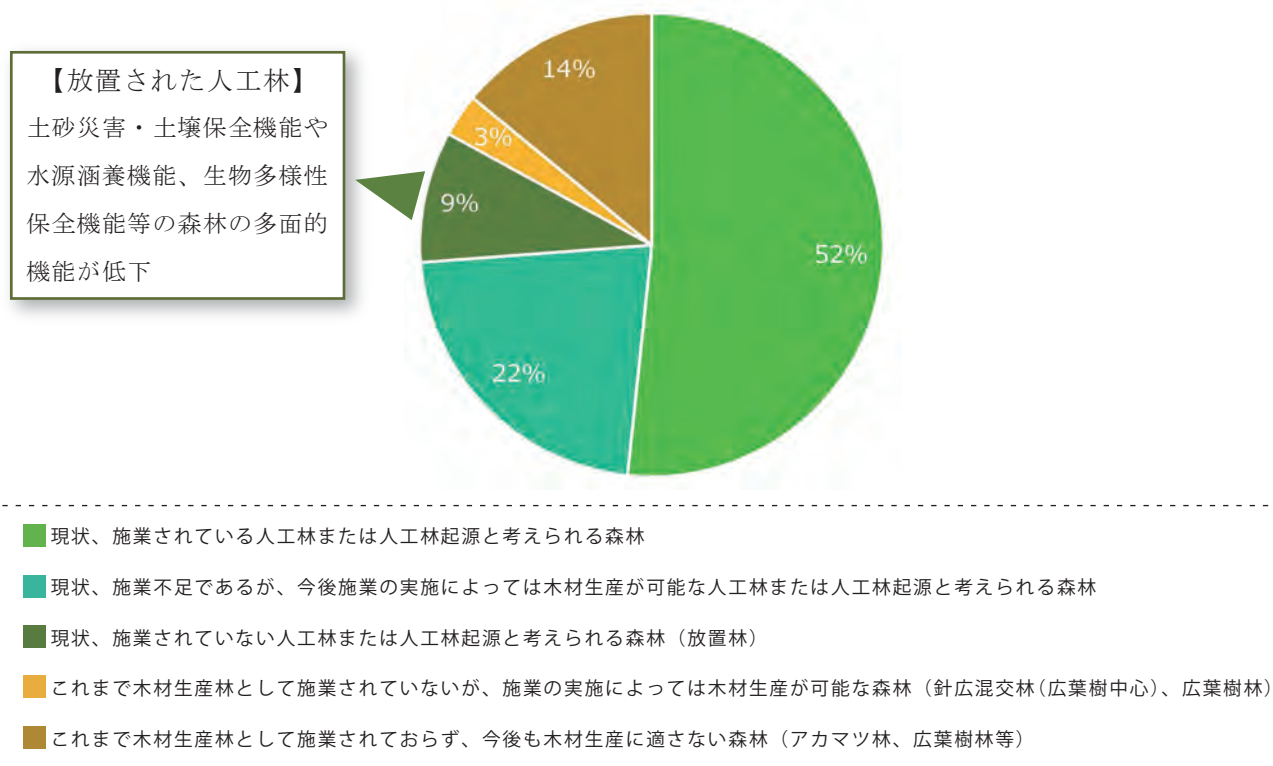
1) 森林概況

現地調査結果をもとに、間伐や下刈り、枝打ち等の森林整備の実施状況や植生の状況から、民有林の人工林または人工林起源と考えられる森林については、現状において木材生産林として施業されている森林、施業不足であるが今後施業の実施によっては木材生産が可能な森林、施業されていない森林に区分し、それ以外の森林については、施業の実施によっては木材生産が可能な森林、今後も木材生産に適さない森林に区分しました。民有林における人工林または人工林起源と考えられる森林のうち、全体の約9%が現状において放置された人工林の状態となっています。



現地調査実施状況

放置されている人工林では、間伐が遅れているために林床が暗く、下層植生がほとんどない林分が存在します。このような人工林は表層崩壊の可能性があるほか、土壌の保水能力も低下しています。また、生息生育する動植物が少なく生物多様性が低い森林となっており、森林の多面的機能が低下しているといえます。特に林道から離れた森林や急傾斜地の森林は、施業のコストや手間がかかることから、施業不足となっている傾向が見られます。森林の多面的機能を高めていくためには、このような放置された人工林を適切に管理していくことが望まれます。



【現在の森林整備の状況（面積割合）】

※平成29年度(2017)～令和元年度(2019)にかけての現地調査結果より

2) 人工林

概ねヒノキからなる人工林は、2 齢級以下の林分はほとんどなく、現在は植林が進んでいないことを示しています。3 齢級以上の人工林では、ほとんどが間伐や枝打ちなどの森林整備が行われていますが、一部の人工林では、植林後ほとんど保育施業がされておらず、放置林となっています。また、整備されている森林でも、2 回目 3 回目の間伐が遅れている場所が散在しています。

間伐後の下層植生は豊富で、シロモジ、クロモジ、ミズメ、カンバ、シデ類、ナラ類、マルバノキ、ホオノキ、ヌルデ、コシアブラ、サクラ類、カエデ類等多くの広葉樹が生育しています。しかし、強間伐を実施した場所ではミヤコザサ等のササ類が繁茂し、それが下層植生の発達を阻害する可能性があることから、将来、植林木への影響を注視する必要があります。

間伐が全く行われていないため地表が露出し、表土の流失が見られる森林は奥山でわずかに見られる程度です。森林内の崩壊地も最近崩れて出来たものは確認できませんでした。しかし、沢筋では大雨による土砂の流失跡が多く見られ、今後土砂災害の対策も考える必要があります。

3) 人工林以外の森林

針葉樹と広葉樹の混交林は、植林後に除伐等の施業が未実施または施業が遅れた影響から、ヒノキなどの植林木の中にアカマツや広葉樹が自然発生し混生するようになった森林や、植林されず広葉樹と針葉樹が自然発生し何も施業されていない森林があります。今後これらの森林を木材生産林として整備すべきか環境保全のための森林として整備すべきか検討が必要です。

林齢が 100 年以上の針葉樹の森林は小面積に限られます。植林起源と考えられる林分もありますが、大径木が多く天然林の様相を呈しており、森林の多面的機能が低い森林です。今後積極的な施業を計画する必要性は低いと考えます。

また、白川の北側には林齢 100 年以上のアカマツ林（マツタケ林）が随所で見られます。マツタケ林としての施業技術が確立されていない現状では、あえて森林整備する必要はないと考えます。

4) 獣害などの林業被害

近年全国的にニホンジカを初めとする野生動物による農林業被害が多発しています。本村では多少の発生が確認されるものの、猟友会の捕獲協力や防護柵等による自己防衛により、現状では大きな林業被害は発生していません。しかし、ニホンジカやカモシカの糞が森林内の各所で見られることから、今後はさらに被害防止対策を講じていく必要があると考えられます。なお、一時期問題とされたマツ枯れやナラ枯れはほとんど確認されず、近年発生は少ないと考えられます。

5) 森林の所有者境界、林道など

森林の所有者境界は、地籍調査が進んでいない森林でも随所に境界杭が設置されており、また、境界を示す石積みや境界木が多く存在することから、概ね明確になっていると推測されます。しかし、所有者が境界を把握していない場合や不在地主の増加により、境界が不明瞭な場所が存在するため、地籍調査を迅速に進めることが必要です。また、林道を始めとする路網は村内全域を通して概ね整備されており、今後さらなる開設により、木材の搬出費軽減等、森林管理の効率化が進むと思われます。

